



●Answer

沖縄市・コザ山 球陽寺 前住職
 帰依 龍照(きえりゅうしょう)



Q 将来、子どもたちが困らないようにと、

母の納骨の際、お墓の内部を撮影しました。その写真を見た友人から、「亡くなったばかりのお母さんを、三十三回忌が終わったお父さんの隣に置くのは間違っている。両親とも、成仏できていない」と厳しく批判されました。今さら、お墓を開けるわけにもいかず、とても困っています。

(千葉県在住 中城村出身のMさん)



A 最近、同じような質問をよく受けます。

子どもたちのことを思って撮影されたのですが、ひよんなことからトラブルの原因になることが多いようです。

Mさんがおっしゃるように、沖縄では、墓地へひんばんに行くものではないという慣習があり(注1)、納骨以外にお墓を開けることは、ほぼ不可能だと考えられています。しかし例外もある(注2)、これらの機会を利用してお墓を開け、骨壺を置き直すこと(骨身案内⇒フニシンスウ ケー)ができるので、ご安心ください。

伝統を学びつつ
 生前の思いを尊重する

さて、友人のご指摘についてですが、おそらく、亡

くなったばかりのお母さまのご遺骨には、「御門番(ウジヨバン)」という見張り役をやらせなさいというアドバイスなのでしょう。

沖縄のお墓では、亡くなってすぐの方のご遺骨は、お墓の入り口に近い場所に設けられている「汁減らし(シルヒラシ)」というところに安置され、お墓の門番の役割を担うという伝統的な考え方があります。なので、ご友人の意見にも一理あるというわけです。

一方で、夫婦ともに三十三回忌(終焼香⇒ウワイスコ)を経過したことを条件に、夫婦の遺骨を一つの骨壺に入れたり(夫婦合葬)、骨壺同士を隣り合わせにする(仮夫婦合葬)という慣習もありました。しかし戦後、儀式・法要の簡素化や、生活改善を奨励してきた沖縄では、夫婦合葬の条件を満たさずとすると、最

長の場合60年以上もかかることから、夫婦いづれかが三十三回忌を経過すればよいという考え方に変わってきました。

最近では

三十三回忌を待たず、一周忌や三回忌を過ぎれば夫婦合葬が可能とされるケースが増えているのも事実です(お葬式の直後に合葬される地域や家庭もあるようです)。

慣習にならってお母さまのご遺骨を「御門番」とすることも大切ですが、お母さまの生前の思いを一番よく知る喪主・遺族の方が、「最愛のお父さんの隣に置いてあげたい」という考え方で円満に一致したのなら、これがお母さまへの一番のご供養になるのではないのでしょうか。

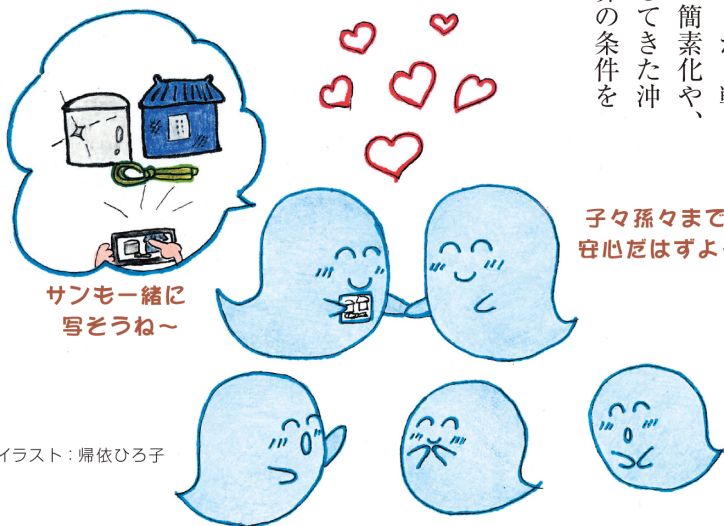
写真の扱いにも
 思いやりの心を

Mさん、お墓の内部の写真は、あくまで喪主・遺族

だけの大切な個人情報としてあつかい、今後は第三者に見せるのは控えた方がよいかもしれません。地域や家庭によって、慣習・作法が異なることもありますので。

ところで、お仏壇やお墓を撮影するとき、サン(スキなどを十字に結んだ魔除け)と一緒に写し込んでいる人を見かけます。先輩方のお話では、サンと一緒に写すのは、魔除けの意味だけでなく、喪主・遺族の総意の写真であること、証になるのだそうです。そこには、第三者のアドバイスを、やんわりとお断りするということ、とても丁寧な思いやりがあると教えていただきました。

子々孫々まで
 安心だはずよ〜



サンも一緒に
 写そうね〜

イラスト：帰依ひろ子

注1 <お墓に向かう行事>

- ◎旧暦三月(新暦四月)「清明祭(ウシーミー)」=沖縄の年中行事
- ◎旧暦七月七日「七夕(しちせき・たなばた)」=お墓の清掃をする日
- ◎納骨されている故人への「法事(ウスコー)」=沖縄の年忌法事(ニンチヌコー)

注2 <お墓に向かいでもよいとされている日・期間>

- ◎閏月(コンチチ)=旧暦で、1年が13カ月となる期間
- ◎旧暦七月七日「七夕(しちせき・たなばた)」=ヒーナシ・タナバタ(お日柄を選ばない日)といわれ、この日だけは吉凶なしとされている

<お墓を開けてもよいとされる行事>

- ◎夫婦合葬(ミートウダウ)=別々に収められている夫婦の遺骨を、同じ骨壺に収めること。「後生結婚(グソヌニビチ)」ともいう
- ◎洗骨(センコツ)=火葬が普及する前の時代の改葬儀礼。墓に安置した柩(ひつぎ)の遺体の骨を洗い清め骨壺に収める慣習。一般的に旧暦七月七日に行われていた